

論文の要約

報告番号	甲 乙	医 第 122 / 号	氏 名	渡 辺 典 子
学位論文題目	Multidetector-row Computed Tomography Evaluation of Bilateral Bronchial Narrowing Associated with Increased Pulmonary Blood Flow in Children with Congenital Heart Disease			
<p>左右シャントを有する先天性心疾患患児は周術期の管理を困難にするような呼吸症状をしばしば経験する。左右シャントを有する(すなわち心室中隔欠損症、心房中隔欠損症、動脈管開存症など)先天性心疾患患児における気管の狭窄について実際に気管の径を計測して評価した論文は今までにない。以前は気管の狭窄を評価するために侵襲がある気管支鏡を用いていた。この論文では MDCT を用いて正常児、呼吸困難をきたした先天性心疾患の患児の気管の径を計測し、高肺血流を呈する心疾患患児の気管狭窄を予測した。</p> <p>方法は、1～52 ヶ月の 86 名の児の左右気管支の長径、短径を計測し、面積を出し、対象は 3 つのグループに分けた。グループ 1 は正常群(52 例)、グループ 2 は左右シャントを有する無症状の群(25 例)、グループ 3 は左右シャントを有する呼吸困難をきたした群(9 例)である。</p> <p>結果は、グループ 1 では、年齢、身長、体重、体表面積は気管の短径、長径、面積に相関していた。なかでも気管の面積がもっとも相関していた。グループ 2 では左気管支の面積はグループ 1 より有意に小さかったが、右気管支は有意に小さいというわけではなかった。グループ 3 では右気管支の面積はグループ 1,2 より有意に小さかった。左気管支は有意にグループ 1 より小さかったが、グループ 2 より小さくはなかった。</p> <p>これらの結果は、MDCT は左右の気管支の狭窄を明らかにするために有用で、高肺血流によって左主気管支の狭窄は心疾患の初期に進行する、ついで右気管支が狭窄をきたす、ということを示唆している。以前の MDCT は、患児の心血管の構築異常を明らかにするために有用であったが、近年様々な呼吸困難を低侵襲で評価するために有用で、頻繁に用いられるようになった。MDCT を用いて気管狭窄を明らかにすることは、現在呼吸困難の症状をきたしている先天性心疾患の患児だけでなく、今後呼吸困難の症状をきたすことが予想される患児の評価をする際にも有用である。</p>				